

経営・マネジメント層

専門家

従業員

システムレベル・データ

レベル5

AI-Powered企業として確立・影響力発揮

すべての事業・企業がAI×データ化し、業界そのものの本質的な刷新（disruption）を仕掛けている。

- AI×データを理解するCxOが
全社、業界の刷新の中心を担う
- 業界全体、他社との連携を推進

- 全技術者が領域×AI知識を持つ
- AI×データ活用の技術、研究両面
の最先端の人材、経験を持つ

- 皆が理数・AI×データ素養を所持
- 社内外の専門家と共同で活用
- ミドル層は資本、人脈で貢献

- リアル空間も含め全てがデータ化、リアルタイム活用
- 協調領域では、個別領域のAI機能、API提供、共通PF化
- 競争領域では、独自機能のAI開発、サービス化

レベル4

AI-Ready化からAI-Powered化へ展開

AI×データによって企業価値を向上。コア事業における価値を生むドライバーとしてAIを活用。

- AI×データを理解し事業活用する
人材を経営層に配置
- AI-Readyになるまで投資継続

- AI×データ活用の技術開発、研究
両面で最先端テーマの取組み開始

- 過半が高いAIリテラシーを所持
- データ・倫理課題を整理・遵守
- AI×データによる業務刷新が推進

- 業務システムと分析システムがシームレスに連携
- 大半の業務データがリアルタイムに近い形で分析可能

レベル3

AI-Ready化を進行

既存の業務フローのAI×データ化による自動化に目途がつく。戦略的なAI活用も開始する。

- 経営戦略にAI活用を組み込み
- AIへの投資をコミットメント
- 幹部社員へのAI教育を実施

- 相当数のAI分析・実装要員を持つ
- 独自のAI開発・事業展開が可能

- 実務へのAI活用が徹底
- そのための手順やツールも整備
- 社員へのAI教育を開始

- 業務フロー、事業モデルがデータ化
- 業務系に加え分析系のデータ基盤も整備開始
- 領域特性に応じてAI化、RPA適用等を使い分け

レベル2

AI-Ready化の初期段階

AI活用についてスモールスタートで経験を積む。一部の簡易業務のAI化も専門家の力を借りつつ着手開始。

- AIの可能性を理解し方向性を発信
- 具体的な戦略化は未着手
- データ・倫理課題は未整理

- 少数がAI・データを理解
- 外部と協力し、既存技術を適用

- 一部のAI基礎の理解
- AI×データ素養を持つ社員も存在
- AI人材の採用を開始

- 一部業務でAI機能の本格適用を実施
- 一部データが分析・活用可能な形で取得可能に
- 顧客行動、環境、リアル空間のデータ化は未着手

レベル1

AI-Ready化着手前

AIの方法論の議論が先行し、AI×データを活用した事業運営・刷新・創造は未着手。

- AIへの理解がない
- AIが業界や自社の企業経営に
与える影響の認識も不十分

- システムは外部委託中心
- IT部門はIT企業とのつなぎ役

- 経験、勘、属人的対応が中心
- 課題も人員、工数をかけて対応
- 理文分離型の採用

- レガシーシステムが肥大化
- データの収集、取り出し、統合に年単位の時間が必要
- データの意味や示唆の理解も不十分